

現国の授業で、初恋という詩が取り上げられた日の事だった。

やはりと言うか何と言うか、その日のお昼はそれぞれの初恋の話で持ちきりで。

花は自分のお弁当箱を広げながら、友達の話を聞くとはなしに聞いていた。

「それで？花は？」

「え？」

「んもう、聞いて無かったの？初恋は何時つて話」

「ああ」

花はお箸を置いて、曖昧に笑った。正直に言えば、今現在の好きな人もいなければ、初恋さえまだなのだ。こんな事を言えば、他のみんなには驚かれるだろうか。

「まだ、だよ」

それでも、そう正直に告げるとかなの目が丸く見開かれた。

「え？」

「だから、初恋はまだ」

「ええくくくつ？」

信じられないと言っても言うように声を上げるかなに、花はちよつとだけ眉を寄せた。驚かれるかな？とは思っていたけれども、本当に驚かれるとやっぱりちよつ

と凹む。こんな事なら、適当に幼稚園の時にだよと言つて、初恋でも何でもでつち上げておけば良かったのだろうか。

「…つて事は。花、好きな人もいないの？」

「うん、特にはいないかな、今は」

「えー！花つてば『命短し恋せよ乙女』だよ？花の命は短いんだよ？あ、この場合は咲いてる花の方の花だけ」

そこら辺きつちりと突つ込みを入れつつも、まるで恋をしていないのがいけないような口ぶりに花はむ、と眉を寄せた。恋をしたいから好きな人を作るのではなく、好きな人が出来てこそその恋なんじゃないの？と花は思うのだが。

目の前の恋多き友人の意見は少しばかり違うのかもしれない。

「ほら、花はかなとは違うんだから、いいじゃないの」

「うん、まあそれはそうなんだけど」

途中で彩が助け船を出してくれたので、その話はそれで終わりになった。

花がほつと胸をなで下ろしていると「でもさあ」とまだ話し足りないようなかなの声が聞こえた。

「好きな人はいなくても、こんな人がいいなつて言う